

は之に打ち勝つ方法を講ずるのが得策である、されば心の衛生には此無益に心を勞するの愚を避けねばならぬ。

(四)心を大きくせよ。かくて初めて小事に屈托する事なく、少しの事に心配する事もなくなる、人が我れを誹つたからとて我れが其爲めに一寸も價値の減ずるわけでも無く、人が我を譽めたからとて其爲めに一毫も價値の増すわけでもない、それに人の毀譽褒貶に苦勞して無益に心を疲らすのは、精神衛生の上に最も害毒である。

(五)生死に安立せよ。人の一生は生に始り死に終る、此の生死の上に安心が出来たならば一切の苦惱は凡て消えてしまうのである。宗教といふものは何を教ふるかといへば、此生死に安立せしむるの道を説くので、生を明め死を明めるは佛家一大事の因縁である。されば自力他力、聖道淨土とさまざまに分れて居るが、皆な此生死に明めをつけ、て生死に心を勞せぬやうにするのに外ならぬ。元來生とは何、死とは何てあらう、生も一時の生、死も一時の位で、晝の夜となり夜の晝となるやうなものである。何を悲み何を喜ぶ、たゞこれ姿形の變化するの

で一つの水が雨となり雪となり氷となる、何の異りがない、コンナ事に心を勞して無益の心配をし、折角保たるべき長命を斷つのは人の人たる本分ではない、生れては死ぬるときまつたものだ、さて又死ぬるときまつたものではあるが死ぬまでは生きて居らねばならぬもので、此の死ぬまで生きるといふ事が出来ないが、夫をするに就いていろくど苦勞して却て死ぬまで生きて居らぬ様な馬鹿らしいことを世の中に演ずるものがある。

「磯までは海女も寝ざる時雨哉」た、死ぬるときまつても、それまでは此の身體を大切に、して世の中の爲め人の爲めに働かねばならぬ、此働きをさへ怠らずして死といふ事を心になくすれば、之れを生死透脱したといふ事が出来る、已に生死眼中にない、これ不生不死の境ではないか、不生不死の境これ實に久遠壽命無量の佛だ、阿彌陀といふのは梵語、支那に譯して無量壽とは量りない壽命だ、それに歸化し又は久遠とて無限の





たのであります。女、賢きか、男卑しきか、文明の程度は其國に於ける婦人の地位の高下を以てトすることが出来る。と申すほどです。から女の地位の高まつたのは結構でござります。結構は結構でござりますが、何故に女といふものを、さう尊ぶやうになつたのでせう。腕力では到底男に及ばぬとすれば心の力の方は優つて居るのでせうか。是がなか／＼むつかしい問題であります。

今度は心の方で男と女とを比較します。するには心の働きを例によりて智力と感情との二方面に分ちて見なければなりません。先づ智力の方で申します。と昔から今日まで女に大哲學者といふものもなく、大科學者といふものもござりません。一体女といふものは小さいことには氣がつくが、事物の大綱を捕へるといふ力が少い。他人の着物の破れて居るのや、羽織の七つ下りになつて居るのや、帽子のへこんで居るのには氣がつくが、其人物を看破るといふ力が、ないやうに小さなことには氣がつかず、が、どうも大きなことには抜けて居る、抜けて居るといふと失禮ですが、其

大綱を捕へることが出来ないから、不得要領の所が少なくない、それであるから事物の根本原理を抽象するなぞといふことは思ひもよらず、大思索は出来ないのです。ツマリ男に比して推理の力が弱く、事物を直覺的に判断するといふ弊が多いのです。直覺的なものですから、あの人は善いとか悪いとか直に究めてしまつて、チヨット御世辭でもいふと、デキに本當にしてしまふといふ傾があります。併しかう申すと御婦人の悪いことばかりいふやうですが、決してさうではありません。智力では男に及びませんが、感情の力になります。男よりも強いことがあります。此感情は自ら二つに分れました。一を反情又は反感といひ、他を同情又は愛情と申します。此反情の方も御婦人方は男よりも強いので、憎悪の感は一層激しく、少しでも悪口を言はれると直ぐに腹を立てる。況して他を羨むといふような心から起つた反感即ち嫉妬といふことになり、ます。男にも無いではありません。女の方は餘程強い。疝氣は男の苦む所、悒氣は女の憤む所といふ諺もあるほどで、これがかうじると殆んど氣違ひのやうになつてし

まうものですから、近世の碩儒太田錦城は婦人の性たる淫にして妬なりといひ例のショーペンハワーは婦人は生殖の外に用のないものであるから、どの婦人も皆な同じ仕事があるソコデ婦人が婦人を見るときには商賈敵の感があるのだと申して居ります、即ち同性に對する反感は女の免れ難い所で、彼の近松の世話浄瑠璃の中に「鎗の権三」のおさゝか「ア、思へば恪氣も因果か病か、これほど恪氣深うては我男を手放して海山隔て、よう置くぞ」といふた通り、恪氣は悪いと自覺しても止められぬが御婦人の短所であると思ひます、併し同情の強いのも亦御婦人でヴィクトルユゴーが女は弱し母は強しと申しました如く、去られてもやみに見にゆく職かなで、女といふものは子の愛に引かされることは男よりも強いと申すことが出来、此の強い同情を發展して、ますます廣めて行く所に御婦人方の精神修養の根底があるのであります、又御婦人方の此御心が家庭整理の上に非常の力ともなり、御婦人の本分を御盡しおさる上に尤も必要なことではありますまいか、いろく悪口を申して相済みませう。

【五】ヴィクトルユゴーは佛國近代の文學者です。

せんだ、これから其修養の方を御話しいたしませう。

婦人修養の法は外にない、たゞ此の同情の念を養ふのであります、同情を解し易くいへばおもひやりの五字で、此のおもひやりさへあれば殆んど婦人の道は達せられるのです、一軒の家の中でも親は子を子は親を互におもひやり合へば喧嘩はしたくとも出来、世の中は思ふに任せぬむづかしいものであります、が、デット耐わて居れば「愛さこともなくて花さく嫁菜かな」で、何時かは花さく時節に遇ひます、彼の南朝の忠臣菊地武時が打死をする時に、自分は戦國の慣ひ打死するは致方もないが、それを知らず、に今日や歸るか、明日は歸るか、と留守に城を守つて居る奥方の苦心を思ひやつて、

故郷にこよひかぎりの命ぞと

知らでやひとの我身を待つらん

といふたのに對し、其の奥方は此の歌を見ると共に我が君既に打死したまいし上は此城も守り難しとて一室に籠り

故郷もこよひかぎりの命ぞと

知らでや君の我を待つらん

【六】件淡の歌に  
 思ひ心を、使ふも人の  
 子に思ひくちへて、情  
 といふたのも此の情  
 てす。

【七】一茶の句には  
 動物に對する同情の  
 が多い一茶、蛙まけ  
 るな一茶、こゝにあ  
 り、寝かへりをする  
 ぞわきよれきり、  
 す、なぞは有名も  
 のです。

といふ一首の辭世を遺して死んだのは夫婦其の死ぬ所は異つても其の  
 思ひやり合ふ心は一となつたのであります、此の思ひやりの心は夫婦兄  
 弟親子の間のみでなく、自分の家に使ふ下女下男小僧丁稚に至るまで此  
 の心を持つのが主婦たるもの、道です、昔俳諧師の松雨といふ人が夜の  
 雪を見んとて自分の家の丁稚に供をさせて行かうとするのを其妻がと  
 めて、我が子なら伴にばつれじ夜の雪といふたのは此の召使を思ひやる  
 心が現れて美しい話です、更に此心を大にして牛や馬、犬や猫にまで及ぼ  
 してごらんなさい、此方が思ひやつてやれば牛馬も懐くし犬や猫も尾を  
 振り咽喉を鳴らして來る、鬼貫の句に「行水のすてごころなし虫の聲とい  
 ひ、高杉晋作の戯れに作つた歌に「てすりにもたれて化粧の水をどこへす  
 てよか虫の聲」とあるのも此の少さき虫を思ひやつての心であります、俳  
 諧師一茶といふ人は六歳の時に「我れと來て遊べや親のない雀と」詠んで

自分も繼母であるものですから小さな雀の子をも思ひやつたといふ、俳  
 し私のこゝに御婦人方に望むのは、これだけではない更に此の同情を大  
 さくして道の邊に咲く一本の花にも、峰に生ふる松の木にも此の心を寄  
 せて御覽なさいたいのです、彼の加賀の千代といふ女の句に「朝顔に釣瓶  
 とられて貰ひ水」自分は女のことであるから毎朝井戸端へ水を汲みに行  
 く其の井戸端の朝顔の蔓がのびて井戸の釣瓶にまきついた、水を汲まう  
 とすれば折角伸びた朝顔の蔓を折らねばならぬ、憐れである、これを思  
 ひやつた句で同情の心が溢れて居ります、これのみならず、更に自分の日  
 常御使ひなさるものにも此の同情を以て御覽なさい、思ひやりの心を以  
 て御覽なさい、

【八】大内侍御居士  
 の作です。

【八】あもしろや散るもみち葉も咲く花も

おのづからなる法の御姿

盡天盡地、あもしろく見ることが出来る、佛は實に此の同情の最も大いな  
 る塊で、大慈大悲の眼を以て一切衆生を見たまふので「慈悲の目にくし



大の放蕩家で身持少しも修らず、何か悪いことがあつたと見えて永の御暇になり江戸へ参つて浪人をいたして居りましたから家はますく貧窮で、其嫁が近所の洗濯や裁縫をしてやうやく糊口を助ける位ですのに、舅姑はかくの如く浪々するのも嫁が悪いからだと言はぬばかりに酷くあたり、先妻の子は所謂継子根生で後添を悪くいふて舅姑に告げ口するものですから、およねは全く針の筵に生活して居るやうでありましたが心掛のよいものでありますから、少しも人を怨みず、皆な自分の足らぬからであると思ひ、舅姑や夫に事へ盡はひねもす夜はよもすがら賃仕事に奨んで居りましたが、夫の身持は少しも改まらず、終に家出をしてしまいました、それからといふものは舅姑にはますく酷くあたられ、継子には僻み根性を出されて立つ瀬がないのですが、何時かは我が真心の通せぬことはなからうと、ますく身を慎みて親切を旨として居りましたが、或日舅の留守に其子が浪人してもこれだけは家重代の寶であるからとて舅の大切に居る茶碗を取り出して遊んで居りましたが、過

つて割つてしまい、お祖父さんに叱られるが、何といふたらよいかとシクシク泣いて居りますのを見たとよねは、毎から我れに酷くわたる子であるから、よい氣味でも思つて見て居るのが人情ですが、其子を慰めて妾が謝つてやるから心配すなどいふて、舅の歸りました時其子の罪を受けて、妾の疎忽からコンナことを致しましたと謝りますと、平生から憎んで居る嫁のことですから、舅は大に怒つて、家を大切に思はぬからコンナことをするのだといふて火箸を持って其嫁を打ちました、嫁は額から流るゝ血を拭きながら涙を流して詫びて居りますのを見ました、継子はわたしに代つてアンナに謝まつて下さるかあゝ有難いと思つた一念から、これまで自分が親を親とも思はなかつた心を翻して母親を庇ふ優しい子となり、それが本で舅姑の機嫌もだんく治ることになつたといふ話があります——其後夫も改心して終に歸参が叶ふまでいろいろの話があるのですが略します——これらは母の子に對する愛らしき心が、愛らしき話となつて現はれて人を動かししたものを見ることが出来ます。











愛といふのは無茶苦茶に可愛がるので夫に對しても子に對しても唯だ  
 盲滅法に愛するといふことは夫を過まり子を過る本で、御婦人方の充分  
 に注意せなければならぬとであります。正愛と云ふのは公の爲めに私を  
 忘るると云ふので、彼の山内一豊の妻が陣中の夫に向て「留守のことは御  
 名を汚さじと偏に心がけ居れば毛頭念としたまふことなく、唯だ忠節一  
 偏にのみ御勵み下されべく念じ上まらせ候」と書き送つたのは正しき  
 愛であります。即ち正愛は我といふものを中心とせずして我を忘れて夫  
 を思ひ、國を思ふといふので、眞の勇も亦我といふことを忘れて國の爲めに  
 働くといふ所にあるのですから愛と勇とは全く反對して居るやうです  
 が、其本は一で、此愛あるが故に勇も百倍し、此の勇あるが故に愛にも力が  
 あるのです。佛教の方でも攝受と折伏との二門があつて攝受の方の佛さ  
 まは地藏さまや觀音さまのやうに優しい姿を現はし慈悲即ち愛を以て  
 衆生を濟度して下さるのですが、折伏の方の佛さまは不動明王のやうに  
 忿怒の相を現じて難化の衆生を叱りつけて濟度するといふ勇の方です。

【六】趣味ある生活  
 御覽して下さい。

併し此大忿怒の相を現じてござる佛さまの御心には何うかして衆生を  
 濟度してやらうと思し召す優しい有り難い御心があるので、例へば母親  
 の子を慰さめるのも父親の叱るのも、子の爲めを思ふといふには異りが  
 ないやうなものだと説いてありまして愛と勇とは別のものではないの  
 です。實際此の社會の狀態を見ますと、一面は生存競争で優勝劣敗、少しで  
 も油断をすれば負けてしまふのでありますから如何なる困難に對して  
 も撓まずに進んで行くといふ勇氣がなければならぬのであります。又  
 他の一面を見ますと、共同生活で互に持ちつ持たれつして居ります。既  
 に世の中が持ちつ持たれつして居るといふ事が事實でありますから、互  
 に相愛し相濟ふて行くといふのが人の務めてなければなりません。生存  
 競争の勇あつて社會に活動し、共同生活の愛あつて社會に興味はあるの  
 であります。勇を旨とする軍人、それに連れ添ひたまふ御婦人方の爲めに  
 聊か勇と愛とに就て御話をした次第であります。



る文とによつて三諦三觀の深旨を悟られたといふので、此三諦三觀は天台宗の骨髓で、又始終心要の眼目であります。

この惠文といふ人の後に南岳の惠思禪師があつて、頗る三諦三觀の方便を極められたといふ實に徳行の高い人で、我が聖徳太子は此禪師の生れ代りであるといはれたことのある程の御方で、常に法華經を讀誦して、極まなかつたといふことでもあります。此御方の御弟子が、即ち天台大師で、梁の大同四年に荊州の華容縣といふ所に御生れになつて、七歳の時から能く法華經の普門品を暗誦せられたといふことでもあります。夙に法華經、無量義經、普賢觀經の深旨に達し、惠思禪師より三智三觀の法を授けられて、専ら坐禪工夫し、大に發明する所あり、後天台山上りて、斷崖絶壁の下に端坐思惟し、後皇帝の聘に應じて山を下りて教を説き、晋王廣後に隨の煬帝となるより智者大師の號をたまひ、法華文句、法華玄義、摩訶止觀を講述して、英名一世に高く、惠文惠思と相承せる觀心に更らに教相を加へて、これに天台宗といふものは出來たのであります。これらの講義を筆記して

後に傳へるのは、御弟子の章安尊者湛頂であります。その次ぎが智威、それから慧威、その次ぎが玄明と相承けて、玄明の下に出たのが此書の著者湛然であります。そこで天台宗の系圖は

龍樹—惠文—惠思—智顛—湛頂—智威—惠威—玄明—湛然

となるので、其湛然の弟子に道邃、其道邃の御弟子が日本の天台宗の祖師たる佛教大師であります。サテ湛然といふ御方は唐の睿宗の景雲二年に生れ、睿宗の建中二年に七十二歳にて寂せられたので、天台の教風發揚を以て任とし、天台大師の三大部にも皆な註解を施し、玄義には釋籤、文句には記、止觀には補行があつて、釋門正統といふ書物には、師を呼んで記主といふて且つ贊して、『百歳の後に生れて正法を金湯す功高ふして、力教主に倍するものは荆溪なり』とまで申してあります。正にこれ孔子の後、孟子ありて其道を起し、クリストの後にボーロあつて其道を傳へたやうなものであります。今講述いたします始終心要は、此荆溪の湛然師によつて著はされたものであるのであります。文字の數は少いが、其旨

三 同く天台宗  
と云ひます。支那  
天台と日本天台とは  
餘程趣を異にして居  
るのて日本天台は支  
那天台の外に眞實は  
傳へられず。教密  
隱密といふ風です。

は深く、能く惠文以來の天台の深旨を示されたので、管に天台のみならず、通佛教の道理を尤も簡單に示されたものといふてよいのであります。

サテ題は一部の總標で、本書の始終心要といふ名も、いろく講釋をすればなかくやかましいので、始といふのは理である終といふのは究竟の義であるなどといふて、吟味をしてゆくのが、佛教者の癖だが、惠澄和尚は圓頓行者平日用ゆる所の簡要を述ぶるものであるといはれたので、其意味はわかつてゐる修行の始めより佛果を得るの終りまで常に忘れてはならぬ肝心要のことは何かといふに、それは三諦を觀じてゆくことだ、此空假中の三諦を觀じてゆくのが圓頓行者即ち大乘の極意たる圓教を修行するもの、始より終りまで、此三諦を以て心の鏡とせねばならぬ、始の終だの因だの果だのといふのは、時間の上の區別に過ぎないが、時間を通し無始無終に現はれてをるのが此三諦の道理じや、ソコで始終心要と名けられたので、苟くも大乘佛教を修せんとするものの始より究竟の覺を得るの終りまで此三諦の外はないのだ、それは購義を終つてから全

體を味ふて見れば、此意味がよくわかるのである、これから本文に就て御話することゝしやう。

本文を分つて四段とする、それは

夫、三諦者、天然之性徳也、中諦者統一切法、眞諦者泯一切法、俗諦者立一切法、舉一即三、非前後也、含生本具、非造作之所得也。

これは三諦の性徳は本具であることを示したので、其次きは

悲夫、秘藏不顯、蓋三惑之所覆也、故無明翳乎法性、塵沙障乎化導、見思阻乎空寂、然茲三惑乃體上之虛妄也。

これは此本有の性徳をくらすの迷ひを擧げて、これ體上の虛妄なりと結んだこれで一段サテ、其次きは

於是大覺世尊、喟然歎言、眞如界中、絕生佛之假名、平等大惠中、無自他之形相、但以衆生、妄想不自證得、莫之能返也、由之立乎三觀、破乎三惑、證三智、成乎三徳。



これにて二段

空觀者破見思惑、證一切智、成般若德、假觀者、破塵沙惑、證道  
種智、成解脫德、中觀破無明惑、證一切種智、成法身德、然茲三惑  
三觀三智三德非各別也、非異時也、天然之理具諸法故也。

とあつて、三惑三觀三智三德の修行を示し、さて第四段では

然此三諦性之自爾、迷茲三諦、轉成三惑、惑被藉乎三觀、觀成證  
乎三智、智成成乎三德、從因至果、非漸修也、說之次第理非次

第、大綱如此綱目可知、

と結んだ、これから講義だ、

先づ劈頭第一に「夫れ三諦は天然の性徳なり」と喝破した、三諦といふの  
は次第の文にある如く中諦、真諦、俗諦だ、この三つは天地萬物の天然自然  
と具はつてをる性徳であるといふので、性といふは不改の義で、水の物を  
濕し、火の物を焼くが如く、如何に其物は異つても改まらぬ、變らぬところ

此の理は常  
に佛の教を  
照して下さい、  
三諦は空  
と假、中としていふの  
と同じことす。

をいふのじや、徳といふのは其はたらきをいふたので、天地萬物には如何  
にしても變らぬ性徳である、この三諦は即ちそれじや諦といふのは審實  
の義で、しつかりとした所、少しも、うそ偽りのない所、ものが三つある、蓋  
し此三つは天地宇宙の本體、現相、妙用の上からいふたので、一番下の俗諦  
から説明してゆく方が、わかりよい、俗諦といふは天地萬物、個々別々にさ  
ま／＼の姿をしてをる上をいふたので、花は花、柳は柳、茶碗は茶碗、土瓶は  
土瓶と皆な別々じや、併しこの別々のものは何の關係もない、全く特別の  
ものかといふにさうでない、花は花、柳は柳だが、植物といふ點から云へば  
皆な一つ、土瓶は土瓶、茶碗は茶碗であるが、土といふ所からいへば皆一つ  
本來一つの上立てたる假りの相であるから、これを又假諦ともいふ、俗  
といふのは世俗とつゞけて、われ／＼の通常見てをる相じや、さて然らば  
これらば皆などうして出来たのかといへば、因と縁とによつて出来たに  
過ぎない、因といふのは必らず結果を來すべき原因、これを助けてゆくの  
が縁だ、米から稻が出来るからとて袋に入れてつるしたまゝては出来な

い必らず土とか雨とかいふものゝ縁をからねばならぬ、即ち因と縁とによつて出来たもので、植物でも其本は同一の單細胞から別れたものだが、柳となるべきものは柳、櫻となるべきものは櫻と其境遇や事情で異り、同じ土でも土瓶となるべき縁あれば土瓶、茶碗となるべき縁あれば茶碗となる、たゞこれ因縁によつて出来た假りの相に過ぎない、ソコデ前きに擧げた中觀論の中に「因縁所生法我説即空」で、空の上にはあらはれたる假の相じや、この空なるところを眞諦といふのじや、眞諦は偽妄なきの稱で、本體平等にして假りの相はない、此本體平等の上に差別の假りの相をなしてゐるのが天然の状態、空即假、假即空、じや、或る人の歌に

雨あられ雪や氷とへたつれど

とくればたなじ谷川の水

といふのがある、雪やとか雨やとか氷だとかいふのは、皆な假りの相や、もどくとおなじ水に過ぎないが、これは別段とけてから同じのじやない、

如何なれば雪や氷とへたつらん

とけぬもたなじ谷川の水

とけぬそのまゝに一切平等で、天然の状態は決して有に偏つたものでもなく、空にかたよつたものでもない、非有非空、亦有亦空、何もない所に何にもある、無一物の處、無盡藏、花あり月あり樓臺ありじや、一休和尚の所へ、新左衛門が行つた時に、

何物かさし上げたくは思へども

達磨宗にて一物もなし

とやつたのを、新左衛門が。

何物もなきを賜はる心こそ

本來空の妙味なりけり

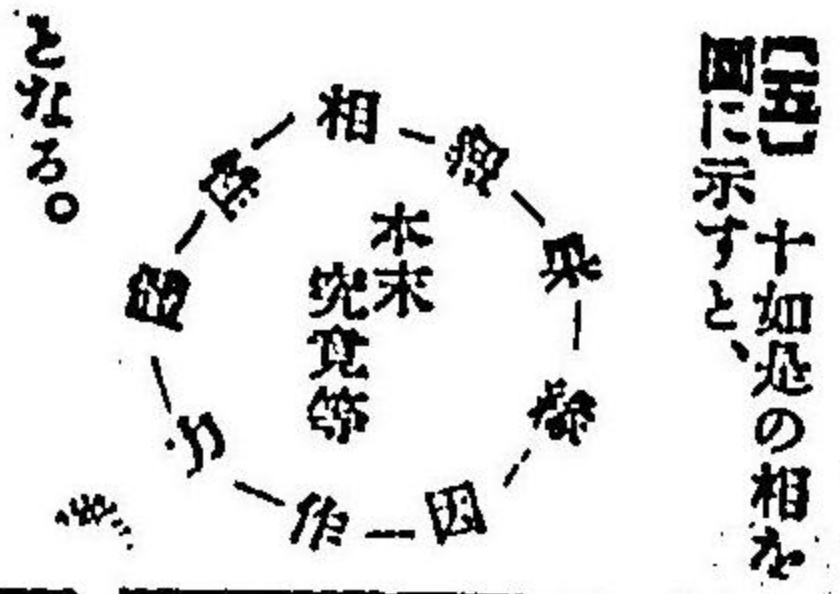
とやつた如く、有に偏せず、無に偏せず、空にもあらず、假にもあらず、中道實相、これが宇宙の眞理で、これを中諦といふのじや、宇宙の状態を其相から見れば、皆な別々、本體から見れば皆な一つ、一つであつて別々、別々であり、一つ、この俗諦、眞諦、中諦の三つは天然自然のありさまで、變化のない所

【四】  
 一休が  
 多に  
 同は  
 野山  
 に入  
 法を  
 定む  
 せし  
 一休  
 の  
 入  
 法  
 の  
 時  
 同  
 じ  
 な  
 る  
 一  
 休  
 が  
 多  
 に  
 野  
 山  
 に  
 入  
 り  
 法  
 を  
 定  
 む  
 せ  
 し  
 一  
 休  
 の  
 入  
 法  
 の  
 時  
 同  
 じ  
 な  
 る  
 一  
 休  
 が  
 多  
 に  
 野  
 山  
 に  
 入  
 り  
 法  
 を  
 定  
 む  
 せ  
 し  
 一  
 休  
 の  
 入  
 法  
 の  
 時  
 同  
 じ  
 な  
 る  
 一  
 休  
 が  
 多  
 に  
 野  
 山  
 に  
 入  
 り  
 法  
 を  
 定  
 む  
 せ  
 し  
 一  
 休  
 の  
 入  
 法  
 の  
 時  
 同  
 じ  
 な  
 る

じや、

體 眞諦(空諦)  
 相 俗諦(假諦) 此三即一  
 用 中諦

次ぎの文に「これを解釋して中諦は一切法を統ぶ眞諦は一切法を泯んず俗諦は一切法を立す」とある、一切法といふは法は軌持の義で、天地萬物はそれ〱定まつた所がある、これを法といふので更らにこれをくわしく講釋すると三千の諸法といふやうに分けるのが天台宗のやり方で、先謙の畧解には法とは三千なりともある、三千といふのは十界、十如是、三世界をいふので、十界といふのは、佛、菩薩、緣覺、聲聞、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の十をいふので、これはこの世に生きとし生けるものを十に分ちて、道德上の標準によつて優劣を分つたので、其中佛、菩薩、緣覺、聲聞の四つは聖人の方だが、アトの六つは凡夫の境界であるといふのでこれを四聖六凡といふのである、これらの十界には皆なそれ〱相應の相がある、畜



【五】十如是の相を圖に示すと

生なれば四つ足であるとか、人間なれば眼耳鼻直であるとか、これを如是相といふ、如是とは此の如し、この通りじや、サテ相ばかりでない改められない性がある、これが如是性、それと共にそれ相應の體質がある、これが如是體、それから其はたらくちから即ち如是力、其動作はたらし、如是作、これを爲すの原因、如是因、これを助くる如是緣、それによつて生ずる如是果、これによつて受くる如是報、其本も末も同じものであるから、これを如是本末究竟等といふので、其相、性、體、それによつてなす力、作、は皆な因、緣、によつて得たる果、報、で本末は究竟して等しきものである、この十を十如是といふので、天地萬物は皆な此十のすかたがある、されば十界といふと十のやうだが、此十は互に他の九を具へてあるの、地獄は地獄、天上は天上とさまつたものではない、十界各々十界を具すて百界だ、百界は各々又十如是があるから千如是だ、これに五陰と衆生と國土との三世間を乗けてこれを三千の理法といふのである、五陰といふのは色受想行識の五つて、色といふのは物質即ち自體じや、受といふのは肉體あればこゝに眼耳鼻舌身

始終心要講

意の六つがある、この六つによつて外界のことを受けこむ、これが受じや、この受があれればそれについていろ／＼の想が起り身口意の働作を爲す、これが行、これを一々に知つてゆくのが識で、ツマリ肉體と精神じや、衆生世間といふのは十界の衆生が働作をしてゆくありさまで、それら衆生の居りまする所を國土といふたので、たゞに日本とか支那とか限つたのではない、それを解り易くいへば、五陰世間といふたのは個人的で、衆生世間といふたのは社會的、國土世間といふたのは宇宙的であると見ることが出来る、併しこの講義に何にもコンナ面倒なことをいふには及ばぬ、一切法といふたのは天地萬物一切といふことだと解してあればよい、一念僅かに動くの時、此三千の法具はるといふのが天台の宗義じや、此三千の法別々に見てゆくのが俗諦であるから、俗諦は一切法を立すとある、立とは建立の義で、皆な別々に立てゆくのが、これが、因縁生、眞諦の上から見れば此假りの相は皆な亡びてしまふ、そこで眞諦は一切法を泯すじやが、此の眞俗の二偏によらず、空假の一方に偏せぬのが宇宙の状態、眞理のあ

〔六〕 三千の法とは  
十界×十界=百界  
百界×十界=千界  
千界×十界=十千界  
十千界×十界=百千界  
百千界×十界=千千界

りさまであるから、中諦は一切法を統ふとある、光謙の略解には「三千を泯ずるにあらず、三千を建立するにあらず、只だこれ三千を總統して外なきなり、即ち法界の義、亦絶対の義なり」とある、この中諦の道理を能く會得すればよいのです、一色一香中道にあらざるはなしで、柳の緑なる、花の紅なるそのまゝに中諦の理があらはれてあるのじや、此の三つは三といふから分けて見るが、決して分けるべきではない、一つのもので、又時間の上から云ふても、孰れか前孰か後といふべきでない、そこで「一を舉れば即ち三、前後にあらざるなり」となる、兎角講釋をしてゆくと、ごちらか前きたとか、どれか主かとか考へたくなるもので、これとこれと同じといふても、先にいふた方が主で、あとからいふたのが客のやうになるのが人間の思想で、考へ違ひはコンナ所から起るので、故に今一層此道理を明かにする爲めに、荆溪大師は「合生本具造作の得る所にあらざるなり」と結ばれた、合生といふのは、有情といふのと同じことで、一切衆生だ、此三諦の道理は一切衆生もどより具してゐるので、人の修證により造作によつて得たのでは

〔七〕 合生とは衆生の心と心得てよし

ない、本からあるのだと云はれた、かういふと三諦は宇宙の理で、別に有情に限つたことではない筈であるといふ御方もあるであらう、慧澄和尚はこれを説明して『三諦は有情に限りしものにあらざれども、行者の身分に就て彰す爲めに含生といふなり』とある、さあ此天然の性徳たる三諦は別に遠い所にあるのでない、われ／＼衆生もど／＼具つてをるのだ、具はつてをるなれば彰れねばならぬではないか、さうゆかぬのは何せかソコで次ぎの文が出る、

悲ひかな、秘藏の顯れざるは、蓋し三惑の覆ふ所なり、

とある、氣の毒なことには此の天然の性徳たる三諦を具しながら、秘藏とは眞如の本徳だ、これが藏されて顯はれぬといふのは、どういふものかといふに、これは三惑とて三つの惑の覆ひかくすがためである、惑といふのはマドヒて眞理を眞理と見ないので、天然にあらはれてをり道理をたのまずに見ないのじや、物事を如是とそとのほりに見ることが出来れば惑でないが、それがそのとほりに見えないのが惑じや、人間といふものは

得手勝手なもので、そのとほりのことをいふても、自分勝手に解釋して、おりのまゝに見ない、コンナ面白い話がある、田舎から来た飯焚き男が、旦那様の茶碗で水を呑んでをるものであるから、下女が見兼ねて『オイそれは旦那さまのじやないか』といふと、其男平然として『ナニ旦那様じやとて乞食じやあるまいし』といふたといふ話がある、下女のいふた意味とは全く違ふ、自分勝手の解釋じや、も一つ面白い話は、或る人が非常に立派な灰吹を持つてをつて客に出したが、客がかまはずに煙管をトン／＼とはたくものであるから、ハット思はずいふと、客はすまして『ナニ煙管は大丈夫です』といふたといふことである、このやうに如是をも如是に見られぬ、これが惑この惑が三つある、これを三惑といふのじや、次の句は惑の相を示したので、故に無明は法性を翳し、塵沙は化導を障へ、見思は空寂を阻つとある、即ち惑に無明塵沙、見思の三つあるので、從義の註には『無明とは法界を了せず、明なる所なきなり、塵沙とは無智の數多あるに譬ふ、見思とは解等より名を立つるなり、應に知るべし、三惑皆なこれ性具同體にして障と爲

る云々』とこれを詳しく説明するはなか／＼むづかしいことじやが大内青巒居士はこれを矢張個人的社會的、宇宙的とわけられて見思の惑くわしくは見惑、思惑で見は見なりと見解をつけて起すの惑で、貪、瞋、痴、慢、疑、と食るべからざるを貪り、瞋るべからざるに瞋り、迷ふべからざるに迷ひ、慢るべからざるに慢り、疑ふべからざるに疑ふ、さてこれは間違だとわかっても、心の中にまだのこつてをる惑がある、これは思惑だ、穢多といふものはいやしむべきものでないとわかつてをつても、まだどうもいやしいやうな氣が去らぬ、青大將といふ蛇は害をせぬものじやとわかつてをるが、どうも恐ろしい氣がする、これ思は惑がのこつてをるのじや、そも／＼かういふ惑は何から起るかといへば、宇宙平等空寂の道理を悟らぬからじや、宇宙平等一味空寂のものどわかれば、彼我の區別もなければ、愛憎の念もない、どうして見思の惑が起らうぞ、然るにこれに迷ふて此惑を起すのであるから見思は空寂を阻つと云はれたのである。

サテ其次きの塵沙の惑といふのは、空寂平等の上に差別の相があつて賢愚

藥病の差別はチャンとあらはれてをるのに、この區別に味きが故に、惑を轉じて悟に導かんとしても、悟の悟たり、惑の惑たるを知らぬ、そこで懸澄和尚も『化他の用を礙へる故に化導を障へるといふなり』とあつて、俗諦の道理に惑ふてをるのじや、何故にこれを塵沙といふかといへば、塵の如く沙の如く其數多きをいふたのである、これは全く社會的に見たのであるといふてよい。

サテ其根本は無明の惑、大内居士はこれは宇宙的の惑と云はれた、とにかく惑の根本で、かくの如きものをかくの如しと見ず、一念こゝに動くのは法の本有の性が明ならぬ、それが此無明の惑じや、これを法性を翳すといふたので、中諦の理に味きから起り出すのであります、併し、此三惑とて別のものではない、天然自然の本體の上にあらはれたる虚妄の相、明徳々なる鏡の上の影、同様じや、光謙の註には『三惑三諦本と二體なし、但た理體は眞實にして、惑は自ら虚妄なり、不二門に曰く、濁は本有といへども、全體是れ清しと、四明の曰く、既に悟て後ち迷はず、知ぬ清きこれ水の性なること

を』濁つたといふのも清んだといふのも二つのものじやない併しもと  
 く清かるべきものであるからこゝに濁つたと見る明かなるべきもの  
 てあるから鏡と見る。この濁りといひ鏡といふは水や鏡の上にあらはれ  
 たる虚妄の相で木具のものではない。されば此一段を結んで然るに此三  
 惑は體の上の虚妄なりと云はれたのである。然り體上の虚妄に相違ない  
 が虚妄を虚妄と知らずして迷ひに迷ふてをるのが我れらのありさまじ  
 や。或る人の句に

二人ゆく一人はぬれぬ時雨かな。

といふのがある。さあこれはどういふものかと吟味して此句をありのま  
 らに解せず迷ひに迷ふて傘が一本であつたらうの何のと工夫をするが、  
 さてかんがへてよくよく考へれば一人はぬれぬは當然二人ともぬれた  
 のではないかと氣がつくか氣がつかずに迷ふわれらじや。さあこれを説  
 き示し下さるのが佛である。

是に於て大覺世尊明然として歎じて言く眞如界の中には生佛之假名

【八】或る歌人が  
 上りの句を得て如何に  
 かして下りの句を考へ  
 つんと考へたが考へ  
 る人がいふその考へ  
 て「うらくるその考へ  
 たやどして」とつ  
 二た成る程これつ  
 未だ。

を絶し平等大感の中には自他の形相なし。但衆生の妄想を以て自ら證  
 得せず之能く返すなし之に由つて三觀を立て三惑を破し三智を證し  
 三徳を成ず

これ第二段であります。此に於て大覺世尊即佛が歎かせられて仰せら  
 るゝに明とは長歎息の貞であります。絶對眞如の中には衆生とか佛とか  
 と云ふ差別はない。この差別は吾々の妄想煩惱でありまして眞如の上  
 は佛とか衆生とか云ふ名の名とすべきはないのである。この名のあるの  
 は一味平等の上に妄想を起し茲に佛陀であるの衆生であるのと云ふ名  
 稱を立つるに至つたのである。絶對平等の中には自分であるの他人であ  
 るのと云ふ自他の差別はない。元來衆生も佛も同一であるのをば自己の  
 妄想煩惱からして自己が佛であることを知らず終に迷に迷ふて能く元  
 にかへすことが出来ないのであると大覺世尊は明きなされて此の妄  
 想を破り佛と同じき位に入るの法を指示し下されたのであります。毎度  
 ながら申します通り。

【下駄足駄造りかへれば釋迦阿彌陀】

て元來同じ木であつても因縁によりて釋迦とも彌陀とも下駄とも足駄ともなると同じく吾々も佛も元とも同一であるのに迷によりて吾々は斯様な形相になつたのである然らばその迷とは何であるか云ふに即ち前に述べました所の三惑であるこの三惑を破るには如何がしたならば宜しいであらふかそれは三觀になるのである。三觀を立て三智を證し三徳を成すのにあるのであります。その三觀とは何んであるかその三智とは何んであるかその三徳とは何んであるかと云ふに夫れを第三段にお説きなされた。

空觀は見思の惑を破り一切智を證し般若の徳を成す假觀は塵沙の惑を破り道種智を證し解脱の徳を成す中觀は無明の惑を破り一切種智を證し法身の徳を成す然るにこの三惑三觀三智三徳は各別に非ざる也異時に非ざるなり天然の理諸法に具はる故なり

とこのことをお話しする前に先づ觀のことを申しませう觀とは詳しくは

天台にて止觀と云ひます天台宗の安心は昔よりこの止觀にあるのであります。また維摩經の中にも諸佛法身は止觀より生ずと云ふてあります。此の止觀は非常に必要のことであります。その止とは梵語に奢摩他と云ひまして寂靜の意味である自分の身口意の三業を止め心を寂靜としづかにするのを云ふのである。吾々互の迷の起るのは皆な心が動くからである。鈴木正三老人の語にも吾々互の心は辻堂のやうなものである。辻堂には乞食も宿れば武士も入る大名も入る吾々の心には善い心も起れば悪い心も起る何時もこの心が靜では居られない常に心の波が動いて居るこの動き易い心を止めて靜にするのが止であります。座禪はこの止のことである。而して觀とは梵語に毘婆舍那と云ひます。支那にそれを譯しまして明了と云ふ能く世の中の因縁生滅の相を觀じ物に執著することなく心を明らかにするのを云ふのであります。この止觀がありまして始めて心が外から動かさるゝと云ふことはない既に動かさるゝと云ふことがなければ一々世間の事柄について誤つた視察をすると云ふ



こともなくなる昔より佛教修行は戒定慧の三つがあるがその戒とは佛の戒め佛のおきてを能く守ることであつて定とは此處に云ふ所の止のことであります心を一處に定めて動かさないやうにするが定である。慧とは觀のことで能く因縁生滅の相を觀じ智慧の光を明にするのを云ふ今は三惑を解くために空觀と假觀と中觀を立てますがこれは即三惑に對して云ふたものでありまして差別の相に惑ひ平等の理に開き者には世の中のものは一切空なりと觀じて空に迷ふから見思惑を破りて其處に一切平等智を得るのであるこれを一切智と云ふ又この空の理が解つたのを般若の徳と申しますこれは智慧のことでもあります。また假觀とは能く萬象差別の道理を觀察し差別に迷ふて樂も非も一つである聖人も凡夫も一である云ふて差別の理を忘るゝ假解は能く塵沙の妄を破り差別の理を明にし道に志す心も起つて來るのである佛と云ふも吾々と云ふも元來同一である然るに何故に斯く異つて居るのであらう何故かはつて居るのであらうと云ふことを考へたならば佛と同じくならうと

する心も起る今は佛より云へば一切差別の境界に應用する智となりて自由自在に人を教化し得ることが出來るこれを道種智と云ふ道種智とは諸佛の道法を用ひ衆生の妙徳を起すの智であるこの智によりて成るは解脫の徳である元來法は平等でもなく又差別でもない平等にも差別にも偏せざる宇宙の眞理なるにこれに迷ふが抑も根本の惑なり故に中觀を以て有に非ず無に非ず中道實相なることを觀察して無明の惑を破る既に根本の無明を破つたならばこゝに現はるゝ智慧は一切の法は元來無差別であると云ふことを現はす一切種智である斯様にいたして宇宙本來の面目である所の法身の徳を成すことが出來るのである今これを圖に掲げますと。

見思惑—空觀—一切智—般若  
 煩惱—塵沙惑—假觀—道種智—解脫涅槃  
 無明惑—中觀—一切種智—法身

斯の如く吾々の迷の三惑はこの三觀によりて曇なる吾々の煩惱により

て迷ふて居る心の鏡を三觀によりて拭へば固より有して居る三智の光現はれ而して三徳の働をなすことが出来るこの三惑三觀三智三徳は別物ではありませぬ又異なる時に起るものでもありません天然自然と煩惱が其儘菩提になると云ふが天地自然の道理であるそれ故に本文に、茲三惑三觀三智三徳各別にあらざるなり、異時にあらざるなり、天然の理諸法に具はるの故なりと、三と云へば別の様に思ひますけれども一の日に焼くと暖むると照すとこの働さがあるこれは法身般若解脱に喩ふこの三は一つの日に有つて居るので別々ではないその通り空假中もそうである從義の註に、

自心が止水湛然として即一念無想なる之空と云ふ徳として具はらざるなきを假と云ふ一にあらざる異にあらざる中と云ふ一切法の空寂一相なるを一切智と名く十界諸種の差異を知る道種智と名く二邊既に知る中道にあらざるなし一切種智と名く照明を般若と名く解縛を解脱と名く清淨を法身と名く、

と自己の一念の上に三惑生ず又一念の三觀によりて之を破り一念に三智を得一念に三徳を成す。

傀儡師首にかけたる人形箱

佛出そうと鬼を出さうと

迷ふも一念悟るも一念である。

以上は煩惱を轉じて菩提となさしむることをお示しなされたのでありましたその次は第四段(結末)であつて

然るに此の三諦は性の自爾なり、茲の三諦に迷ふ轉じて三惑となす惑破るれば三觀に藉る觀成れば三智を證す智成れば三徳を成す因より果に至れども漸修に非らざるなり、

とありまして三諦は天然自然として具はり此に迷へば此に三惑となるこの三惑を破るには三觀が出来れば三智を證せられ三智成れば三徳成すと云ふ如く漸々因より果に至る順序あるが如きも元來順序のあるのではない高山に上り下を見しときは、

高い山から谷底見れば瓜や茄子びの花盛り  
 て眺中ちやうちゆうに皆みなな見ゆ然し何れがウリ何れがナスと云ふときは順序が必要  
 である西のウリ東の茄子と云ふ様なものである然し元來一目中に見ゆ  
 るのである己が見方に前後あるのではない故に、  
 之を説く次第なれども理は次第にあらず  
 とあるこれ天台宗の眼目がんもくであつて實に佛教の眞理はこの僅かの文章中  
 に現はれて居る種々様々なる經文があり講釋をなせるも皆なこの根よ  
 り出てたる枝葉に過ぎないのである故に、  
 大綱たいかう此の如し綱目知るべし、  
 とあつて大綱は斯の如し細こまきことは種々な書で研究すべし是て先づ始  
 終心要の講義も終つたのであります。

# 佛教講演集終

明治四十三年三月十日印刷

明治四十三年三月五日發行

佛教講演集奥付

定價金七十五錢

著者 加藤 咄堂

發行者 森江 佐七

印刷者 森江 善次郎



發行所 東京市飯倉町五丁目

電話 芝居三三三番

森江本店

發賣所

東京市本郷區  
谷木町三丁目

森江分店

大阪市北渡邊町  
名古屋市中區

杉本書店  
文光堂

特約  
書肆

磯進堂 鈴木書店  
 東京堂 光融館  
 前川 林書店  
 日黒 柳原書店  
 松村書店 湖風社  
 佛敎館 淨土敎社

(京都)

貝葉書院 法藏館 (久留米市) 菊竹書店 (長野市) 四澤書店  
 法文館 法林館 (廣島市) 洗心書房 (静岡市) 吉見書店  
 山雲寺書店 藤井書店 (長岡市) 覺興書店 (岐阜市) 郁文堂  
 興敎書院 顯道書院 (新發田) 四村支店 (仙臺市) 藤崎書店  
 文光堂 星野書店 (水原町) 四村水店 (山形市) 牧野書店  
 川瀬書院 其中堂 (熊本市) 長崎書店 (小田原) 積善堂

(名古屋)





指月禪師著

指月禪師假名法語

定價金二十錢  
送料金四錢

古田梵仙師著

首書參同契 傍註寶鏡三昧 纂解

定價金十二錢  
送料金二錢

竺山默禪師著

曹洞修證義引導法語

曹洞宗祖道元禪師の腰皮骨は正法眼識にして其の金玉の中より又精粹を抜抄して在家化導の寶典としたるは修證義なり此修證義の其精神を基として引導法語を撰びしは實に本書にして洞門の大導師は日常懷中して應用せよ●定價金十二錢送料金二錢

岸和田一雄師編

洞上佛事編

洞門の諸大徳は是非一水を供ふべし、本書の上巻は洞宗佛事書法式に關する三十有餘の大禪智識の諸法語中其粹を摘録したるもので、曹山、開堂、結制、退院等より引導、施餓鬼會、般若入佛、對佛、等は勿論、祭文、唐經、結制、退院等に關する諸法語を撰録し、更に下巻には上巻の目次に應じて其作例軌範を示して應用自在ならしめ、殊に四六文體を挿入したれば諸法會に臨み立所に大家と列して金言粹句を弄するを得べし●定價金一圓送料共

大内居士題辭 堀川敬堂師跋 神谷篤倫師著

新引導法語軌範

本書は編者數年來苦心の餘り古今の諸法語を渉獵し其の粹を抜き其精を絞りたる指月法語三百撰に應用自在なる軌範を編せしむるは本書の特色にして又外に諸法語の點茶湯用、文六、十餘を附加し殊に本書は一讀に便なる様亦意味の了解し易き様全文に對し和譯を施し總論、起原、附加したる如何なる法名が適當なるか、亦死者生前に得たる法名に對しては如何なる引導法語を起原の大事に生死輪廻の葛藤を截斷し濕薪勝妙の樂境に遊化せしむ●定價金九十五錢送料金八錢

吉水玄信師著

大台四教儀圖記

東台慈澄律師の門下に其人あり知られたる故吉水玄信師の著述にして諸經錄の法數、名目、等を圖解し且つ一々原本の了附け、行數を附記し最も懇切に圖解したる者なれば學者は一本を座右に備へて天台四教儀の眞義を究めよ●定價金十二錢送料金二錢

町元吞空師編

冠導天台四教義

增冠西谷名目 定價金六十五錢  
送料金八錢

釋智禮師著

十不二門指要鈔會本

定價金卅八錢  
送料金六錢

慈澄律師著

止觀大意講要

定價金四十五錢  
送料金四錢

慈澄律師著

法華倫貫講要

定價金五十錢  
送料金六十錢

慈澄律師著

天台三大部講義

定價金五十錢  
送料金五十錢

弘法大師著

性靈集

定價金五十錢  
送料金八十錢

釋實乘師著

觀喜天隨願記

定價金二十錢  
送料金二十錢

弘法大師著

三教指歸

定價金二十五錢  
送料金四錢

周海和尚著

眞言教誠義

定價金五十錢  
送料金六十錢

弘法大師著

付法傳

定價金二十五錢  
送料金四錢

佐伯慈明師著

眞言宗野峯松韻

定價金二十五錢  
送料金四錢

服部統海師著

眞言宗法則和解

定價金二十五錢  
送料金四錢

上野英俊師著

根嶽鈴音

定價金三十錢  
送料金四錢

釋雲照律師著

大日本國教論

定價金四十錢  
送料金六錢

法然上人著

選擇本願念佛集

定價金四十五錢  
送料金六錢

大内青巖先生演譯 安藤正純師和解

淨土三部妙典譯解

本書は他方淨土門正依の無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經なる三部經を國文に和譯せしものにして古來註解せるもの皆な繁簡其要を得ず兩先生深く是を慨し周對なる用意を以て解釋せられたれば三經の眞意義は一讀直に氷解するを得べし●定價金五十五錢送料八錢



赤堀慈恭師著  
**四恩略辨**  
定價金拾五錢  
送料金四錢

渡邊靈苗師著  
註科 **佛說孝子經**  
定價金拾五錢  
送料金四錢

文學博士南條文雄師 大橋徹映師協纂  
**眞宗聖訓**  
定價金拾五錢  
送料金四錢

來馬琢道師著  
**通觀音經講義**  
定價金二十錢  
送料金四錢

大内青樹先生著  
**通般若心經講義**  
定價金二十錢  
送料金四錢

山田意齋更述 松川半山書  
**觀音經和訓圖繪**  
定價金三十五錢  
送料金六錢

西國三十三所 **御詠歌略註**  
定價金十二錢  
送料金二錢

黃葉隱元大和尚著  
觀世音 **吉凶卜占考**  
定價金二十錢  
送料金四錢

赤松大周師著  
**修養小話**  
定價金參拾五錢  
送料金四錢

源弘賢師和訓  
弘法 **眞蹟書訣** 執筆法  
定價金貳拾錢  
送料金四錢

大内青樹先生著  
**通佛遺教經講義**  
定價金二十錢  
送料金四錢

大 **佛法双六**  
定價金十二錢  
送料金二錢

佐田介石師著  
**佛教創世記**  
定價金十二錢  
送料金二錢

弘法大師著  
**佛口傳集**  
定價金二八錢  
送料金二錢

吉水玄信師著  
註科 **心地觀經報恩品**  
定價金四十五錢  
送料金六錢

寸 新まじ 撰ない **調法記大全**  
定價金二十錢  
送料金四錢

近角常觀師著  
**懺悔錄**  
定價金二十錢  
送料金四錢

多田鼎著  
**修道講話**  
定價金二十三錢  
送料金四錢

内田文學士撰  
The light of truth **眞理の光**  
定價金三十錢  
送料金四錢

紀秀信書  
増 **諸宗佛像圖彙**  
定價金五十錢  
送料金八錢

寸 珍 懷中用  
國の寶家の寶 **三寶日記**  
並製金十七錢  
送料金十三錢

新井白蛾先生著  
**古易斷**  
定價金三十錢  
送料金五圓

山崎義之先生編  
**赤穂義士隨筆**  
定價金七十錢  
送料金八錢

寸 珍 近角常觀師著  
**眞俗佛事編**  
定價金十八錢  
送料金二錢

村上文學博士著  
**人生と信仰**  
定價金三十錢  
送料金四錢

榮西禪師著  
**人生の要路**  
定價金四十錢  
送料金四錢

宮内省式部寮編  
**出家大綱**  
定價金二十錢  
送料金二錢

鈴木牧之先生編 京人百編書  
**神社祭式**  
定價金三十五錢  
送料金四錢

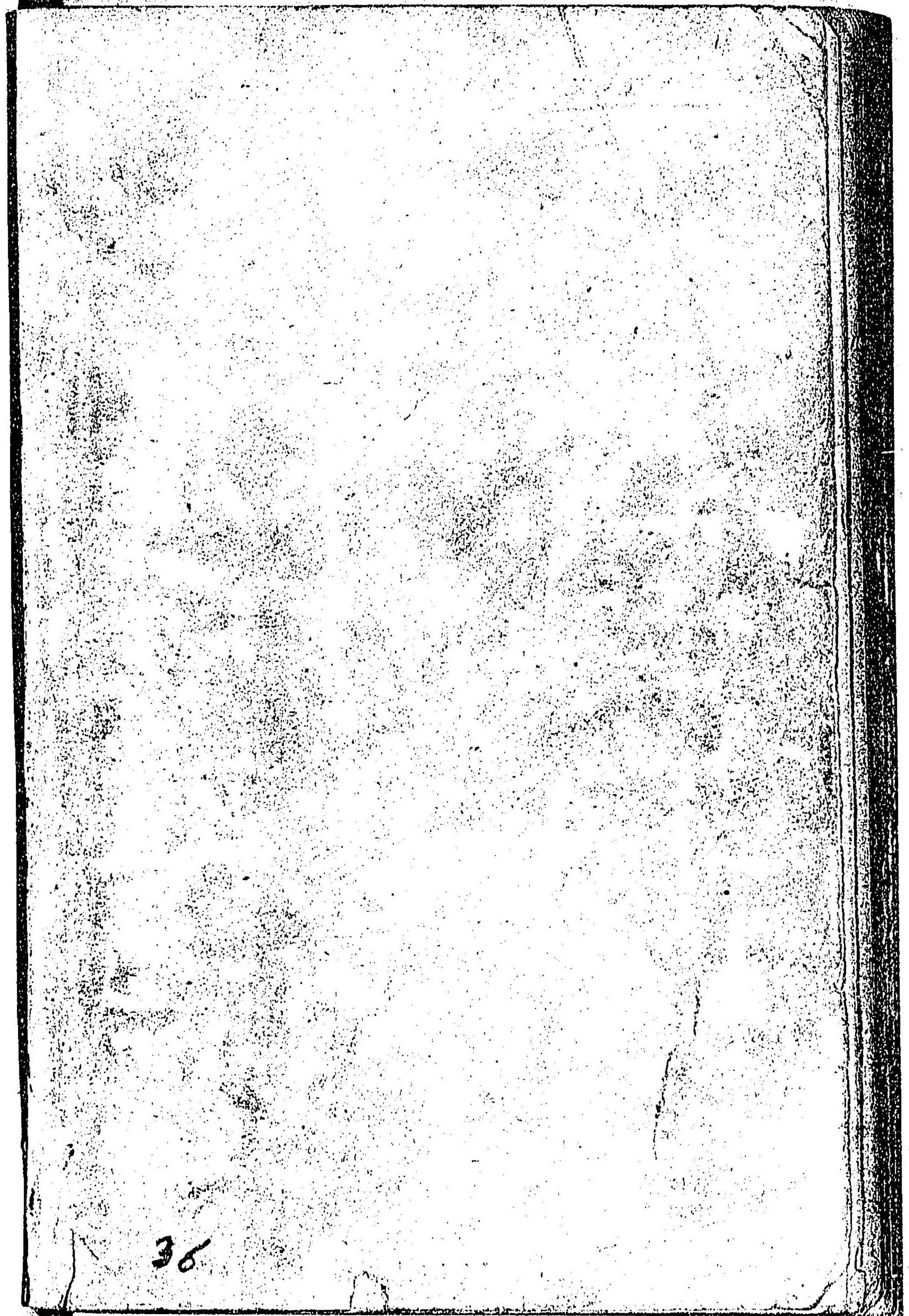
香實先生著  
**北越雪譜**  
定價金十一圓  
送料金十二錢

沖惟稔清風著  
**茶道秘錄**  
定價金五十錢  
送料金六錢

**律詩韻函**  
定價金七十五錢  
送料金十二錢

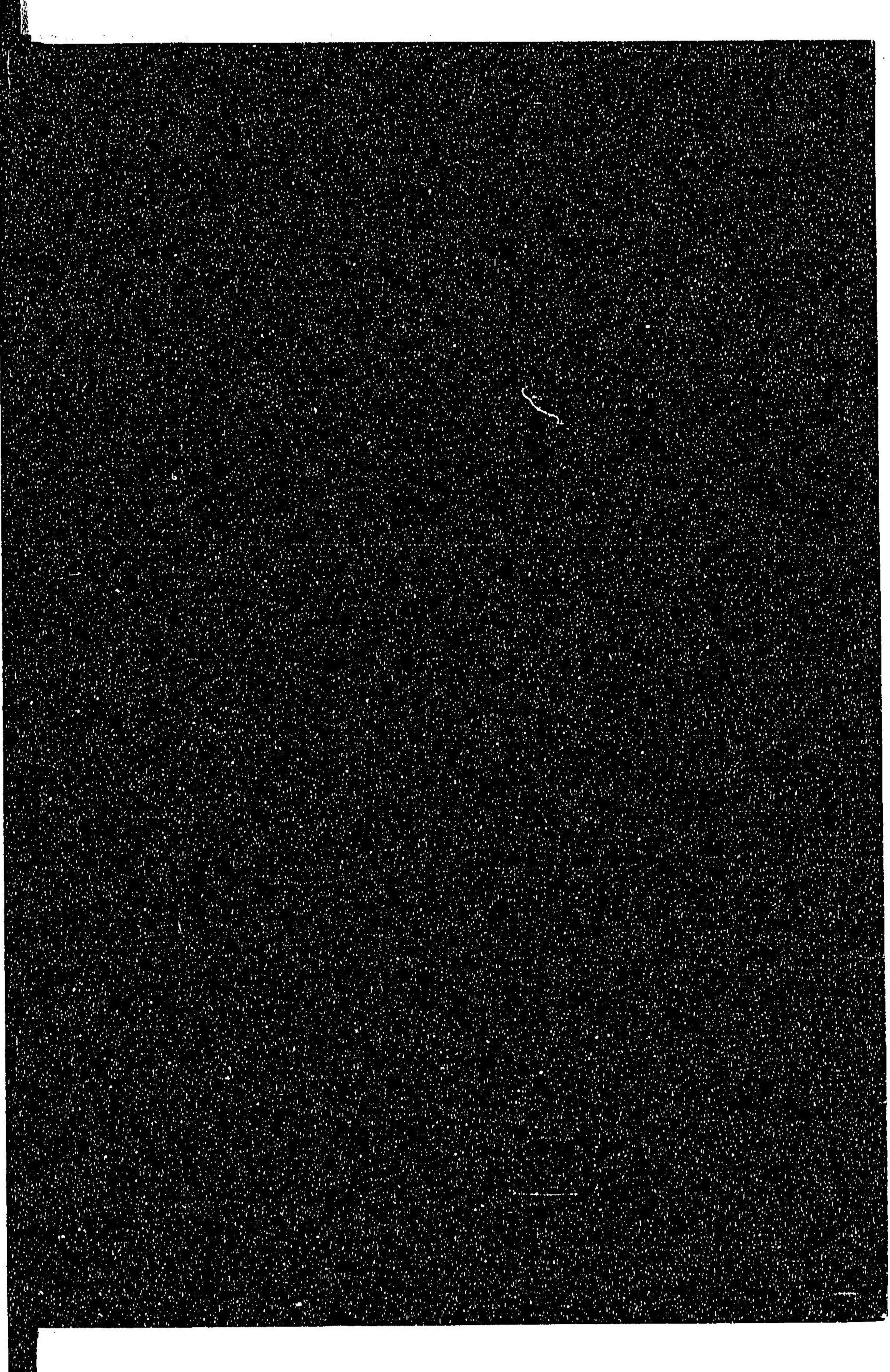






36

324  
172



324  
172

015457-001-4

324-172

仏教講演集

加藤 咄堂/著

M43

ABC-1115



36 2. 6